



TITLE:

# 京大東アジアセンターニューズレター 第451号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

---

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第451号. 京大東アジアセンターニューズレター 2013, 451

ISSUE DATE:

2013-01-14

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168289>

RIGHT:

## 目次

- 中国ニュース休載のお知らせ
- CSEAS・JBIC共催 セミナー(第2回)のお知らせ
- ポル・ポトと私
- バングラデシュ短信 : 2012年 12月上旬
- 【中国経済最新統計】

## 「中国ニュース」休載のお知らせ

平素はニュースレターをご愛読下さり、まことにありがとうございます。

今号は編集者が急病のため、「中国ニュース」は休載させていただきます。読者の皆さまには大変ご迷惑をお掛けしますが、何とぞご容赦下さいますようお願い申し上げます。

京都大学東アジア経済研究センター

\*\*\*\*\*

## CSEAS・JBIC 共催 セミナー(第 2 回)のお知らせ

CSEAS・JBIC共催 セミナー (第2回) を下記の要領で開催いたしますので、ご関心のある方はご参加下さい。

記

### CSEAS・JBIC 共催 セミナー (第 2 回)

報告者：スドラジャット・ジワンドノ 氏

南洋工科大学（シンガポール）教授

(1997年アジア金融危機時のインドネシア中央銀行総裁)

論題： インドネシアの持続的成長への展望—アジア危機前とは違うのか？

日時： 2013年1月17日(木) 14:00-15:30

場所：東南アジア研究所 共同棟4F 409 セミナー室

[http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/about/access\\_ja.html](http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/about/access_ja.html)

キャンパス地図は添付のとおり

言語：英語

要旨：

リーマンショックの後、欧州ソブリン債務危機が深刻化するなか、先進国が軒並み景気低迷を続ける一方、アジアの新興・開発途上国は比較的高い成長を維持しています。とりわけ人口規模が大きく、天然資源が豊富なインドネシアは、活発な資本流入を伴う消費主導の好景気を続けています。しかしながら、インドネシアは、2014年の総選挙・大統領選挙へ向けて政治の季節を迎えつつあるため、景気拡大に歯止めがかからず過熱化し、いずれマクロ経済の不安定化に至るリスクが懸念されます。特に、先進諸国が超金融緩和政策を進めるなか、インドネシアへの旺盛な資本流入がバブルを招くリスクはないのか、今回はシンガポール南洋工科大学S・ラジャラトナ ム国際問題研究大学院のスドラジャット・ジワンドノ教授（元インドネシア中央銀行総裁）をお招きし、アジア通貨危機前との比較の観点から、インドネシアの持続的成長への展望を議論します。

照会先：東南研 三重野 mieno-lab@cseas.kyoto-u.ac.jp, 075-753-7311

\*\*\*\*\*

人間はきわめて可塑的な存在であって、天使にもなるし悪魔にもなる。**状況次第では、私自身も平気で人が殺せるような悪魔性を発揮するでしょう。**ゾンビーじみた表情の人間はこの東京にもわんさといますね。たくさんの人間が日本でも不条理な死を強いられている。精神的な殺害も日常的です。そういう意味で私は、あのカンボジアの大虐殺を、他人事のように見てはいけないと思うのです。カンボジアの大虐殺は、この現代世界で、いつでも、どこにでも起こりうる大虐殺、すでに進行しているかもしれない大虐殺のしるしなのです。そういう目で見るとき、カンボジアの悲劇は、初めて人間一般の問題として身近に迫ってくる。

(「カンボジア黙示録」 井川一久編著 田畑書店 1987年8月10日刊 表紙より)－①

そこには地獄があった。細川美智子さんと二人の息子は、その地獄で悪夢のような極限の生を生きた。そして**天使にも悪魔にもなりうる人間性の証人となった。**

(「カンボジアの戦慄」 細川美智子・井川一久共著 朝日新聞社 1980年12月15日刊 まえがきより)－②

**人間は、天使でも、獣でもない。そして不幸なことには、天使のまねをしようとおもうと、獣になってしまう。**

(「バンセ」 パスカル著 前田陽一・山木康訳 中公新書 P. 230より )

現在、世界中の労働集約型企業が中国を総撤退し、東南アジアの低賃金国に殺到している。しかしながら、それらの諸国にはそれぞれに固有で複雑な歴史や社会条件が存在しており、それを無視したり、一律視したりすれば、ビジネスは大きな痛手を被ることになる。中でもカンボジアには、つい30年ほど前、ポル・ポトの大虐殺の嵐が吹き荒れており、その精神的な後遺症が今でも社会の各層に色濃く残っている。カンボジア進出企業は、ポル・ポト大虐殺という歴史の真相を正しく理解することなしに、その地での成功を勝ち取ることはできない。井川氏は前掲著で、「かつて世界でもっとも豊かだった天恵の地、あのメコン中流域の平原は、いま白骨に覆われているといっても過言ではない」と書いている。極端に聞こえるかもしれないが、大虐殺の真相を何も知らない進出外資企業が、政府などの工場誘致の甘言に乗せられて、立派な工場を建設した場所、それそのものが、大虐殺の現場であった可能性を排除することはできないのである。縁起を担ぐわけではないが、多くのカンボジア人の怨念のこもった場所に工場を建てて、その企業が隆々と栄えるとは、私にはとても思えない。

中小企業家同友会アジア情報センターは、現代のカンボジアを正しく理解するために、12/07、名古屋に井川一久氏をお招きして、「現代カンボジア史」、とくにポル・ポト時代の歴史の勉強会を行った。

2012年は、私にとって、心身ともに、一大転機の年であった。精神的には学生時代から親しんできた中国と決別することを余儀なくされ、肉体的には自分自身の老化現象を認めざるを得ないような状況に陥ったからである。ちょうどそのようなとき、私はこのポル・ポトの勉強会という機会に恵まれ、井川氏という絶好の歴史の生き証人に出会ったのである。私は自宅静養中、ポル・ポト関連本をできるだけ多く読み、自分の人生をポル・ポトと照らし合わせて考え直し、井川氏の講演会に臨んだ。以下は、ポル・ポト講演会での井川氏の指摘を、自分の人生に引きつけ直して書いた文章である。

なお、それぞれの項目の後に、「※参考:井川氏の著作からの抜き書き」を記しておいた。長文であるが、読んでいただければ、事態をより深く理解してもらえと思う。

## 1. ポル・ポト政権時代には、カンボジア国民の30～40% (約275万人) が殺された。

カンボジア人民共和国の「ポル・ポト体制下の犯罪調査委員会」による犠牲者数調査報告(1983年7月25日時点)は

死者数を2,746,105人と発表している。

井川氏は、前掲著①で、「1969年の国連統計では、カンボジアの総人口は806万人だったが、調査もれの地域が多く、調査方法もずさんだったので、実数は900万人以上だったという見方もある。ポル・ポト政権はこのうち100万人がカンボジア戦争で死亡したと発表する一方で、最後まで総人口を800万人以上と発表していた。しかし私が79年5月と80年7、8月に調べたところでは、ポル・ポト時代に1家族当たり4割以上の人命が失われており、350万人内外の人口減は確実と思われる」と書き、前掲著②で、「この国に武田は1968～69年まで住み、井川は1970年から72年まで住んでいた。私たちはカンボジアの土と人を肌身で知っているつもりであり、それだけに、日本人としてはポ政権下のこの国の変容をかなり正確に、また実感で知りうる立場にあると思う。だから断言しよう。ポ政権下のこの国には、人類史上まれにみる地獄があったのだ、と」、「20世紀は“大量殺人の時代”といわれるが、わずか3年9か月の短日月に総人口の30～40%が自国の異常な権力装置によって直接間接に殺され、生き残った人々も心身に深い障害を負ったというような例は、ポル・ポト時代のカンボジア以外にはない。70年代後半のカンボジアは、まさしくこの世の

地獄だった」と書いている。

井川氏は、ポル・ポト政権の登場前と崩壊後のカンボジアを、その身で体験した、世界でも数少ないジャーナリストである。また前掲著②の細川氏は、ポル・ポト政権下のカンボジアを生き抜いた日本人女性であり、彼女の数年前の生々しい記憶を書き留めたのがこの著書である。私はこの2著で、ポル・ポトの大虐殺を十二分に証明できている。

## 2. ポル・ポト率いる赤色クメールは極少数派であったが、偶然性と中国の支援により権力を握った。

### ①偶然性と中国の支援

1950～60年代のカンボジアは、シアヌーク殿下の指導の下、フランスからの独立を達成し、肥沃な大地の恩恵を受け自給自足の安定した国家を形成していた。カンボジア国民の多くはシアヌークを支持しており、パリ帰りでインテリ崩れのポル・ポトやイエン・サリが率いる極左で極少数派の出る幕はまったくなかった。しかしカンボジアをめぐる国際情勢は騒然としていた。隣国ベトナムには米国が侵攻を開始し、中ソ対立が激化、中国では毛沢東が大躍進運動の失敗を文革で巻き返そうとしていた。そのような渦中でシアヌークは米中ソ、北ベトナム政権などとも交渉を続け、不安定ながらも中立を保とうとしていた。

そのころ文革派が台頭しはじめていた中国は、米国の「中国封じ込め政策」の打破のため、北ベトナム軍に加担し、かつカンボジアを親中国に仕立て上げるため、物心両面でポル・ポトなどの極左少数派を支援した。

ところが、米国の侵攻で劣勢に立った北ベトナム軍とベトコンは、カンボジア領内にホーチミンルートを築くなど、カンボジアへ逃げ込んで生き残りをかけようとしていた。中立政策を取るシアヌークはそれを黙認した。あせった米国は、親米派ロン・ノルにクーデターを起こさせ、シアヌークを追放し、ベトナム革命軍を追ってカンボジアに侵攻した。

ベトナム革命軍は、米軍と戦うために、中国に支援され武装闘争を展開していたポル・ポト率いる赤色クメールの軍隊を育成した。やがて和平協定によって、ベトナム革命軍はカンボジアから撤退した。ここに権力の空白が生じ、これに乗じて赤色クメールがその武力と中国の支援を背景に、カンボジアの全土を支配したのである。

### ②赤色クメールの権力奪取年表

1940～50年代に、ポル・ポトはパリに留学、左翼知識を身に付けた。ただしマルクス主義関係の一般解説書の域を出なかった。ポル・ポトは貧農の生まれということになっているけれども、ほんとうはコンポントム州の名家の出身。1962年8月、クメール人民革命党が壊滅、その流れを汲んで、ポル・ポトらがカンブチア共産党(赤色クメール)設立。

1965年3月、米軍、ベトナム戦争に本格的派兵開始

1965年末～66年初頭、ポル・ポトとイエン・サリが文化大革命始動時の中国を訪問。毛沢東思想に基づく11項目の活動原則を発表。文革本格化。

1967年4月、赤色クメール、中共文革派の始動で武装闘争開始。

シアヌーク、中立政策を保持。

1970年3月、親米派ロン・ノルによるクーデター

シアヌークが北京で王国民族連合政府(GRUNC)とカンブチア民族統一戦線(FUNK)の結成を宣言。

赤色クメール、GRUNCとFUNKに参加。

1970年4月、米軍とサイゴン軍がカンボジアに侵攻。ベトナム軍は全土に拡散し、FUNKの軍隊の育成とロン・ノル軍との戦闘を開始。

1972年3月、GRUNCが北京の会議で最高軍事司令部の設置を決め、最高司令官にキュー・サムファン、参謀総長にソン・セン、作戦部長にポル・ポト、政治部長にヌオン・チュアを任命。ポル・ポト派が軍事指揮中枢を握った。

1973年1～3月、ベトナム軍、ベトナム和平協定によりカンボジアから撤退。赤色クメール、ベトナム軍と衝突、他派指導者の暗殺開始。カンボジアに権力の空白が生じる。

1975年4月、プノンペン陥落。ポル・ポトが全権力を握る。ベトナムでサイゴン陥落。

1977年12月、民主カンブチア軍がベトナムの国境各省を攻撃。

1978年12月、ベトナム軍、カンボジアに侵攻。

1979年1月、ベトナム軍、プノンペン解放。

1979年2月、中国軍、ベトナム侵攻。中越戦争開始。

### ※参考:井川氏の著作からの抜き書き。

・シアヌークはとくに、ベトナムは早晚統一される。それは歴史の必然だという長期的な展望に立った。ベトナム民族の統一は正義だとも考えたのでしょう。ハノイおよび解放民族戦線と友好関係を保って、アメリカの支援するサイゴン政権とは断交した。だからといって革命勢力につくのではなくて、あくまでも中立です。どちらにもつかない。ですからアメリカと一応の関係は持つし、ベトナム革命勢力を支援するソビエト、中国とも友好関係を保っておくということで戦火を防いでいた。ただし裏では、事実上ハノイに協力していた。ホーチミンルートを黙認し、ベトナム革命勢力の補給・通信・休養基地の存在を許した。しかし原則として中立であるという立場で、戦火がカンボジアに及ぶの



- を防ぐための綱渡り外交をやった。
- その中立が国内建設にも功を奏して、1963年まではアメリカの援助も受けていたし、ソビエト、中国、フランス、西ドイツ、日本などの援助も受けていた。つまり東西両陣営とうまくやっていた。
  - シアヌークは、スイスのような永世中立の形で国際的に承認させようと奮闘していたわけです。ところが東西両陣営はカンボジアを身内に取り込もうと、ものすごく工作した。ベトナム戦争との関連で、カンボジアに非常な利用価値があったからです。アメリカはプノンペンを味方にすれば、全面的にカンボジアをベトナム戦争遂行上の戦略的後方、一種の策源地として利用できる。ベトナムの革命勢力と中ソにすれば、カンボジアを取り込めばサイゴン包囲の態勢が完成する。
  - ニクソン大統領は、アメリカの撤退を前提とした戦争の「ベトナム化」を唱えた。それを完全にやるためには、ベトナム国外にある革命勢力の後方基地と輸送路を押さえなければならない。つまりカンボジアで軍事行動をしなければならない。その障害物はシアヌークだからシアヌークを潰せ。それがロン・ノルらによる1970年3月のシアヌーク追放クーデターです。
  - このクーデターはアメリカの戦略的大失敗だった。カンボジアはまだ基本的に独立自営農民の国だったからです。彼らはシアヌークを引き続き敬愛していた。つまりシアヌークを敵に回すことは、1970年の時点では、国民の大半を占める独立農民を敵に回すことだった。
  - 国民の多くは、シアヌークのよびかけで結成されたカンボジア民族統一戦線(FUNK)と、シアヌークが北京で樹立したカンボジア王国民族連合政府(GRUNC)のほうを支持していた。この両者はベトナム革命勢力との共闘を宣言した。で、ベトナム国境地帯から追われたベトナム革命勢力はカンボジア全土に拡散して活動し始めた。豊かなカンボジアすべてが彼らの策源地になり、後方基地になった。カンボジア農民も彼らに好意的だった。彼らはこの国で1973年にアメリカをパリ和平協定に追い込み、さらにサイゴン政権をつぶす力を蓄えた。逆にアメリカは無力なロン・ノル政権を支援して、広大なカンボジアの平原と山岳地帯でベトナム革命勢力をおいまわさなければならなくなった。結局、ロン・ノル政権はつぶれた。アメリカのインドシナ戦略は破産した。
  - とにかくシアヌークの名前は大きかった。カンボジア国民の大多数にとって、シアヌークは国の正統性の象徴だった。シアヌークの名が FUNK に正統性を与え、ボル・ポトの赤色クメールにも正統性を与えた。
  - ロン・ノル政権がなぜ負けたかといえば、まずシアヌークの権威をいただく FUNK のほうに国民が心を寄せていたからだし、またロン・ノル政権が無能かつ無責任だったからです。
  - シアヌークの名前に匹敵する FUNK の決定的勝因は、ベトナム革命軍の役割です。カンボジア戦争は1970年から75年まで続いたけれども、初めの2年間、71～72年の FUNK 側の主役は、実はベトナム革命軍です。FUNK の軍隊なんて、武器の操作もろくに知らない雑多な集団で、せいぜい後方支援、あるいは小規模なゲリラ活動にしか向かなかった。実際にアメリカ軍、サイゴン軍とロン・ノル軍を相手に本格的地上戦をやったのは、全部ベトナム革命軍です。
  - FUNK の政治組織と軍隊は、こうして戦っていたベトナム革命軍の背後で育ってくるわけです。
  - 赤色クメールは戦争の初期には最小のグループの一つだった。FUNK 内外の支持者も一般民衆レベルではきわめて少なかったようだ。ところがこれが最終的に全権力を握る。
  - 赤色クメールは1965年から中共の影響下にある。66年からはとくに文革派の影響下にあった。そして FUNK は物資の面では丸抱えといっているほど中国の援助一本に頼っていた。
  - ベトナム革命勢力は FUNK に肉弾を提供していたけれども、物資援助の力ではない。自分自身も中ソの援助で、インドシナ全域で戦っていたのですから。ソ連は最後までロン・ノル政権と国交を保ち、プノンペンに大使館を置いていた。で、FUNK の必要物資はまるまる中国から来ていた。ベトナム革命軍の要請した FUNK の軍隊も、装備いっさいが中国製になった。ということは、FUNK が中国に頭の上がない存在だったということです。シアヌーク議長とペン・ヌート GRUNC 首相が北京に拘束されていたから、ますますだ。
  - その北京では、赤色クメールのイエン・サリ特使が、シアヌーク殿下らを監視する一方で、本国の FUNK の組織との連絡に当たっていた。文革派はイエン・サリを通じて、FUNK の内部問題に介入できた。やがて文革派のおかげで、赤色クメールは中国の援助の窓口を独占した。軍事援助の窓口を握るということは、軍事指揮権をにぎることです。こうして赤色クメールは、中共文革派の忠実な代理者として、FUNK 内部の少数派でありながら、FUNK を牛耳ることになったのです。
  - 1973年にベトナム和平協定ができた。この協定にはベトナム戦争の全当事者が外国から軍隊を撤収しなければならないと規定している。で、カンボジアにいたベトナム革命軍は引き揚げていく。そのために FUNK に対する中国とベトナムの影響力バランスは崩れてしまった。中国が100%のスポンサーになった。ベトナムという邪魔者がいなくなって、FUNK 内部での赤色クメールの発言権は決定的に強まった。革命軍は赤色クメールの軍隊と戦闘しながら引き揚げていった。
  - 73年には、赤色クメール以外の FUNK の活動家が、ベトナム革命軍について続々と亡命している。赤色クメールによる粛清と暗殺を恐れたわけです。
  - ボル・ポト政権には問題が多いが、中国が排他的措置権を行使することができる東南アジア唯一のこの政権を絶対

につぶしてはならない、というのが当時の北京指導部の共通認識だったと思われる。

### 3. 大虐殺は、ポル・ポト固有の要因と人間一般の普遍的本質による相乗作用の結果である。

#### ①ポル・ポト固有の要因

**私は若きころ、学生運動に没頭していた。**所属していた青年組織では、責任者として4桁に及ぶ学生の統率を任されていた。しかしある時、上部組織と方針上の意見の相違が起き、それが原因となり些細なことも付け加わって、私はその位置を追われることになった。私の処分が決定された会議で、私は昨日までスクラムを組んで敵と戦っていた同志が、手のひらを返すように、私を罵倒したことを、今でも鮮烈に覚えている。そのとき私は、彼のその言葉から彼の心中には、私に対する大きな学歴コンプレックスが沈殿していたことを知った。私はその体験から、ポル・ポトが抱いたという劣等感や怨念が彼の異常行動に大きく影響を及ぼしたということをよく理解することができる。

- ・ポル・ポトやイエン・サリは貧農出身ではなく、カンボジアの名家出身であり、パリに遊学したが、大学入学資格試験に失敗するなどし、失意のうちに帰国しており、その心底にはエリートへの劣等感が強く残っていた。
- ・ポル・ポト率いる赤色クメールの兵士たちは、米軍やロン・ノル軍に追われて、カンボジア山中に逃れて長く貧しい生活を送ったため、中央平原で豊かな生活を送る農民に怨嗟の念を抱いていた。
- ・赤色クメールは極少数派であり、偶然にカンボジアの権力を手に入れたが、国民の支持や同意を得ていなかったため、権力を維持するためには、**反対派を抹殺する意外に統治手段を持たなかった。**
- ・中国の文革派の直接的な影響を受けたため、国民を単純なカテゴリーに分け、内部の敵を見つけ出し、それを抹殺する思想と手法を真似た。

#### ※参考:井川氏の著作からの抜き書き

- ・ポル・ポト政権の指導者には、このクメール・クロム(南部クメール人で中央クメール人に劣等感や被差別意識をもっている)が多い。事実上のNo.2の独裁者とされるイエン・サリがそうです。彼の場合には、「挫折したインテリ」のコンプレックスが、もう一つ加わる。本国のクメール人とベトナム人の双方に反感を持っていて、しかも裕福な家に生まれて神童扱いされながら、パリに遊学してバカロレア(大学入試資格試験)に失敗した。…ここから生まれやすいのは、つまり、革命家としての理想主義というよりは、むしろ世間一般への怨念です。これはヒトラーやスターリンにもみられたもので、それがポル・ポト時代の大虐殺と無縁ではないだろうと思う。…ポル・ポトもフランスのバカロレアに落ちて、イエン・サリと同じような道をたどった「挫折したインテリ」です。ポル・ポトは貧農の生まれということになっているけれども、ほんとうはコンボントム州の名家の出身で、本名をサーロット・サルといい、いとこはモニボン国王の側室であった。
- ・ポル・ポトやイエン・サリは要するに、既成のカンボジアのエリート社会に入り損ねた周辺人だった。ナチスの幹部がそうでした。周辺人の持つ心理的特性は、ひとたび歪んだ方向を与えられると、恐ろしく非人間的な現れ方をする場合がめずらしくない。
- ・部落と村の集会では一般住民は発言権を持たず、部落委員と村委員の説教を拝聴するだけだった。説教の中味は、農作業、家畜管理、農具の取り扱い、肥料づくり、生活規律などに関するオンカーの指示が大半だったが、クマン・ケアウ(外部の敵)とクマン・クノン(内部の敵)に対する警戒の呼びかけも多かった。
- ・67年から68年にかけてのサンクム右派政権の赤色クメール狩りは、たしかに大々的なものでした。赤色クメールとは無関係なのに、赤色クメール協力者の容疑で逮捕された人も多い。…つまらない「人民戦争」のまねごとをやったために、赤色クメールは大損害を蒙った。多くの黨員とシンパが投獄され、あるいは殺された。拠点も次々につぶされて、最高幹部までが隠れ家から隠れ家へ逃げ回らなければならなかった。もともと赤色クメールは少数派でした。63年以降は、僻地に分散して活動していたために、中央平原の都市や農村には大衆的基盤はほとんどなかった。この少数派が67年以降、さらに極少数派になった。このことは、彼らが後に示した凶暴性とも無関係ではないだろう。中央平原で平穏に、また無関心に暮らす人々に対する憎悪、怨恨、侮辱といったマイナスの心理的要素が強まったことは確かでしょうね。なにか絶対化された目的を持つ少数者は、孤立すればするほど不寛容になりがちですが、これは赤色クメールにも当てはまる。そのうえ、彼らはサンクム右派政権の弾圧下に僻地を転々とする間に、きわめて不合理な体質を身に付けたと思われる。人間の内臓を食ったりするやり方は、明らかにクメール・ルールと呼ばれる少数山岳民族の影響です。焼き畑をやったり狩猟をやったりしていたクメール・ルールは、平地のクメール人とはまったく異質の存在で、いずれも貧しく、教育水準はきわめて低く、殺した人間の内臓を食ってしまえば幽霊になって出ないとか、味方でない者はすべて敵だとかいう原始的な思考の世界に住んでいた。平地のクメール人に対する敵意も強かった。被差別感もあった。赤色クメールは、そういったものを吸収していったといわれている。
- ・ポル・ポト軍の中核になっていたのは、山岳部の少数民族の青年でしょう。彼らの欲求不満や被差別感に火をつけて、開けた地方の住民を徹底的に憎ませた。生き残りの人々によると、「奴ら(都市住民)を肥料にしよう」というスローガンがあったそうです。都市住民、平野部の人々に対する憎悪を、彼らのモラルの心棒にしたのではないか。いってみれば、「憎悪による革命」、中央人に対する周辺人特有の憎しみと怨恨を、イエン・サリなんかは意識的に利



- 用した。
- ・ボル・ポトとイエン・サリは、この世界が搾取階級と非搾取階級に画然と分かれていて、搾取階級を暴力的に打倒すれば万事片付く、といったような単純きわまる革命図式にとらわれていた。…彼らは66年に中国で文革が始まると同時に文革派の指導下に入った。67年、バタンバン州のサムロートなどで始まった武装闘争は、明らかに中共文革派の指導ないし激励によるものです。
  - ・こうして権力を握ったけれども、政治的基盤は何もない。彼らがロン・ノル政権支配地域の都市と村落から住民を追い出した最大の理由は、民衆をそこに残しておけば自分たちがつぶれるということです。
  - ・こうして都市を中心に、反対勢力の温床になる既成社会を、一気に打ち壊し、そのあとにまったく別の社会をつくろうとした。その目指したものは、彼らのジャングルの根拠地と同じく、外部と完全に隔絶した、自給自足の社会だったわけです。「完全に階級のない、自足自立の平等社会」が革命の目的だ、と公式に宣言していますからね。これに伴って、異常な排外主義があげられる。これはちょっとでも外国の色彩を帯びたもの、外国とつながりのあるものすべてを排除し、カンボジアをほぼ完全な閉鎖社会にしたことに現れている。この考えも長い間の山岳地帯やジャングルでの根拠地時代に身に付けたものなのでしょう。
  - ・情報ゼロで、二人で話をするのも禁止されていた状態だから、国民はオンカーの存在を信じていた。兵士もです。一般のボル・ポト派の幹部も、自分たちの上にそういう組織があると思っていた。つまり幽霊を作り出して、その幽霊によって国民を支配した。
  - ・現存する国民を、国民自身のためではなく、本来の「平等社会」のためにのみ使うというのは、つまり「超政治」です。そこでは国民大多数の同意は不要で、反対者、批判者は抹殺すればいいことになる。極少数派の政権で、支持者はほとんどいないから、こうい「超政治」をやるとなると、国民大多数を潜在的な敵とみなすことになる。その敵をいったん排除しはじめると、際限がなくなる。最後は国民全体を殺してしまわなければならないになってしまう。この点はヒトラーともスターリンともちがうところ。同じ「超政治」でも、ヒトラーやスターリンは相当な支持者を持っていたし、抹殺ないし粛清の対象も、ある程度は特定の民族集団、社会集団、もしくは政治集団に限定されていた。
  - ・いくつかのカテゴリーに人間集団を分け、そこに政治的、道徳的、イデオロギー的、文化的な価値判断をからませた。ナチスの場合は主に人種に分け、スターリンの場合は主に階級に分け、また中国の文革でも「紅5類」と「黒7類」というように出身階級と文化概念で分類して人間を取り扱った。ボル・ポト政権では、これを単純で曖昧な文化概念で分類したのだから、それはもうひどいことになる。
  - ・サハコーはバタンバン州だけでも930いくつあった。全土では6000ぐらいあったのではないかな。これがすべて小型アウシュビッツ化を形成する。ナチス・ドイツやソ連の強制労働キャンプが民衆の日常生活の場から隔絶されていたのに対し、日常生活の場であるサハコーが、そのままラゲリであり、またしばしば絶滅収容所同然の世界だった。これほどに全面的で全土的な刑務所化は前例のない体制です。
  - ・ボル・ポト時代にカンボジアは、普通の意味での国家ではなかった。それは巨大な一つの刑務所だった。行政はなく、しいていえば「刑務所行政」しかなかった。こんなことになったのも、ボル・ポト、イエン・サリ派の赤色クメールが、国内にこれという政治基盤を持たない極少数派だったからです。それは国民大多数の同意をとりつけることのできない存在だった。つまり、知的・倫理的ヘゲモニーをまったく確立していなかった。それはまた行政の経験を持たない幼稚な集団だった。それにもかかわらず、偶然的な要因、外的要因によって、にわかに権力を握った。成功すべからざる「革命」に成功した。そうなるとこの集団は、「超政治」の方向へ突っ走らざるを得ない。国民の同意をいっさい必要としない体制を作らざるを得ない。同意を必要としない体制というのは、強制だけで成り立つ体制であって、つまり刑務所です。そこでは当然、民衆の反抗を恐れなければならない。囚人の脱走、反抗、暴動を恐れなければならない。強制的な体系というのは、強制する側にとっては疑心暗鬼の体系です。民衆を常に疑う。民衆に対する信頼感はずEROです。そこで殺す。殺さなければ身がもたない。殺し続けないと安眠できない。しかも支配者自身が国民の大部分に対して、とくにインテリに対して、怨恨や憎悪を抱いている。そして、それを「旧人民」の間で懸命にかきたてる。「旧人民」は唯一の支配の足場であり、強制的な仕組みを支える供給源ですからね。公安部隊（殺人部隊）なんかは、まさにこの怨恨と憎悪だけで生きるように教育された。虐殺の規模が際限なくふくれあがったのは、こういう「刑務所国家」に最大の原因がある。
  - ・いずれにせよ、ボル・ポト時代のカンボジアの民衆虐殺は、あきらかにジェノサイド的性格を帯びた恐るべきスケールのものだった。あと2年も同じことが続いていたなら、民族国家としてのカンボジアは再起できずに滅亡したと思われる。ボル・ポト、イエン・サリ派の赤色クメールが極少数派だったこと、カンボジアの民衆の大半を敵にまわさなければならないほど異常な体質を持っていたこと、中共文革派の影響ないし指導を受けていたこと、サハコー体制が虐殺の規模をふくらませたこと、国民のカテゴリー化がそれに油を注いだことなど、が大きな原因である。
  - ・大量虐殺の理由、…絶対的な権力を維持するために、常に敵を、潜在的な敵をも含めて排除せよということしかなかった。敵を味方につけるという発想法がなく、もっぱら敵を抹殺することしか考えなかった。
  - ・知性を欠いた人間は、幼児同様、敵はあくまで敵と考える。説得や利益誘導で敵を味方にするなどという発想はない。敵はただ排除しなければならない。しかもボル・ポト勢力は、とにもかくにも、「革命勢力」であった。幼稚だったけれども、中共文革派のような「平等化」と「集団化」のイデオロギーがあった。このイデオロギーが単純であるだけ

に、それに多少とも疑問を示す者は、たとえ味方でも許せない。それは異端者である。つまり、「内部の敵」、カンボジア語でいえばクマン・クノンである。そして「敵は殺せ」ということになる。革命集団にしばしば見られるこの不寛容が、ポル・ポト集団の場合、もっともひどい形をとった。だからやがては「旧人民」を殺し、ポル・ポト派幹部をも殺すことになった。

- ・権力をいわば詐取した小勢力が、その権力を守りつつ独自の変革を試みるには、特別な措置、まさに文革思想そのままの措置が必要だった。旧来の地域社会を一気に破壊し、国民大多数を生活の拠点から切り離し、根無し草とし、さらに攪拌し、無名の労働力に還元したうえで集団的に管理するという措置である。国民の強制移住に始まる彼らの「革命」が、このような目的をもっていたことは、例えばプノンペン全市民の農村移住が、「食糧不足」や「反革命分子の策謀」に対処するための措置だったというポル・ポト書記長らの、およそ非合理的な釈明からも知ることができよう。

## ②人間一般の普遍的本質

**私は若きころ、学生運動に没頭していた。**当時の私の喧嘩相手は赤軍派であり、いつもキャンパスで罵倒し合っていた相手の中には、よど号で北朝鮮へ飛んでいった者もいる。彼らの末路は、あの凄惨なリンチ殺人事件であり、浅間山荘事件であった。幸いにも私の所属した組織は当時、非暴力を全面に掲げており、私は難を逃れることができた。今から思い起こしてみれば、私がその非暴力組織に参加したのは偶然の結果であった。当時、赤軍派からの私への勧誘も激しかったので、私は赤軍派組織に足を踏み入れていても不思議ではなかった。その結果、赤軍派に所属していたならば、当然、私もリンチに手を染めていたか、殺害されていたことだろう。その体験から、井川氏の説く、「人間はきわめて可塑的な存在であって、天使にもなるし悪魔にもなる。**状況次第では、私自身も平気で人が殺せるような悪魔性を発揮するでしょう**」という文句は、私にはよく理解できる。それは人間一般の持つ普遍的本質なのである。

井川氏は、「なにか絶対化された目的を持つ少数者は、孤立すればするほど不寛容になりがちです」と書いているが、赤軍派でも「内部の敵」をみつめて、近親憎悪的に殺人が同心円的に内部に向かい、組織内での殺戮が始まった。新選組でも、組織が目標を失い、同時に極限に追い込まれたとき、その矛先は内部の粛清に向かった。私はNHKの大河ドラマで、新選組結成以来の同志である山南敬介が切腹させられる場面を見て、自分の若きころの姿を思い起こし、慄然としたものである。最近知ったことだが、ミャンマーの学生組織も1980年代に壮絶な組織内でのスパイ摘発殺人事件があった。それがスー・チー氏の民主化に乗じて、現在、裁判闘争を行い始めているという。人間は極限に追い詰められたとき、同心円的に内部に敵を作りだしていくものである。それが人間一般の持つ普遍的本質なのである。

講演会で井川氏は私に、「パスカルは“人間は、天使でも、獣でもない。**そして不幸なことには、天使のまねをしようとおもうと、獣になってしまう**”。そこに人間固有の複雑さがある」と話してくれた。これも納得の行く言葉であり、人間一般の持つ普遍的本質の一面なのではないだろうか。

なお昨年私は、あの浅間山荘を中国人が購入したという情報を入手した。私にはその中国人の意図がわからないが、赤軍派の残党がそれを買い戻し、**過去を懺悔し**取り壊すか、虐殺懺悔館として保存すべきではないかと思っている。

## ※参考:井川氏の著作からの抜き書き

- ・民族性は確かにさまざまだが、その違いはいわば人間の表層における違いであるはずに過ぎず、一民族を丸ごと地獄に突き落とすような悲劇の主因にはとうていなりえない。問題は国境を越えた共通の人間性にある。その人間性のうちにひそむ悪魔の因子が、不幸な歴史的、文化的、社会的、政治的、経済的等々の条件の集積によって大きく育つとき、カンボジア以外の国々が同じような悲劇に見舞われないとは決していえないのである。私たちがカンボジアの悲劇を語り続ける理由は、カンボジアとの個人的なかわりあいを別とすれば、まさにこの1点にある。カンボジアの悲劇は私たち日本人の、いや人間一般の悲劇である。それが私たちの未来の運命にならないという保証はどこにもない。
- ・私はポ政権の中枢部一実質はポル・ポトおよびイエン・サリとその協力者たち一が、病院破壊と医師殺害によって国民が大量に死ぬこと、それから学校廃止によって青少年の知的レベルが大きく落ち込むことを知っていたと思う。第2次大戦でのドイツ敗北に際して、弱さを暴露したドイツ国民には生きる資格がないというようなことをいったヒトラーの言葉が伝えられていますが、それに似た狂気じみた考え方がイエン・サリやキュー・サムファンにはあったのではないか。近代的な医療施設がなければ生きられないようなカンボジア人は死んでもいい、と、強い民族は、そういう弱い部分を死なせてから初めて育成される、と。彼らが、カンボジアの人口が100万人になってもいいと思っていたことは、イエン・サリらしい人物が地方幹部に宛てた手紙によって、すでに知られています。ここにみられるのは、冷血というより、自分たちを神のような絶対者の位置に押し上げ、民衆を実験動物のような位置におとしめるという、革命志向の文学青年なんかにありがちな病的心理で、中共文革派の4人組にもそれがあつた、日本の連合赤軍にもそれがあつた。



- ・なにか絶対化された目的を持つ少数者は、孤立すればするほど不寛容になりがちですが、これは赤色クメールにも当てはまる。
- ・ポル・ポトやイエン・サリは要するに、既成のカンボジアのエリート社会に入り損ねた周辺人だった。ナチスの幹部がそうでした。周辺人の持つ心理的特性は、ひとたび歪んだ方向を与えられると、恐ろしく非人間的な現れ方をする場合がめずらしくない。

### ③大虐殺へのカンボジア人民の無抵抗の原因

- ・完全な情報封鎖をされ、権力を誇大視、絶対視してしまった。幽霊に騙された。
- ・極端な恐怖、飢餓などで、自己防衛の意志と能力を失った。
- ・純粹無垢な人間だったため、簡単に騙された。

#### ※井川氏の著作からの抜き書き

- ・情報ゼロで、二人で話しをするのも禁止されていた状態だから、国民はオンカーの存在を信じていた。兵士もです。一般のポル・ポト派の幹部も、自分たちの上にそういう組織があると思っていた。つまり幽霊を作り出して、その幽霊によって国民を支配した。
- ・これはいうまでもなく奴隷あるいは家畜の習性である。恐怖、飢餓その他、あらゆる非人間的な要素が日常普段に満ちている境遇は、人間の内面的自由すら奪う。人々はいわば心身ともに不活性化される。自己防衛の意志と能力は失われる。彼らにできることは、せいぜいのところ無意識の世界、幼児的な心理状態へ逃避することだけである。ポル・ポト時代のカンボジアで、あのような大虐殺がなぜ可能だったのかを知るには、加害者の側だけでなく被害者の側のこういう心理状態についても綿密に調べる必要がある。それはナチス・ドイツやスターリン時代のソ連における大量殺戮と共に、被害者の側にも適用されるべき精神病理学の、まれにみる研究対象である。それはまた特定の政治体制下の、人間による人間の殺戮を避けるための政治学や社会学の研究課題でもあるに違いない。
- ・かわいそうなカンボジアの人々。彼らの大半は、私の経験した限りでは、もともと悪意というものには縁がなかった。赤ん坊のように疑いを知らぬ人々だった。だからこそ赤色クメールにだまされ、この世の地獄を押しつけられることになったのだろう。人殺しをした人々はもとより憎いが、彼らも、よく考えてみれば、無垢だったからこそ悪魔の所業に慣れさせられたといってもいいのではないか。そう考えると、私は旧人民を怨むことができないのだった。
- ・私たちは心身ともに弱り果てていた。命令とあれば、どんな無駄なことでも、またどんなに些細なことでも、機械的にやるという習性が身に付いていた。そんなことをして何になるのか、と考えることすらしなかった。屠殺場へ連れて行かれるときの牛か豚に似ていた。殺される人にも、見送る人にも、言葉では表現できないような悲しみと諦念だけがあつた。抵抗などには思い及ぶはずもなかった。

## 4. カンボジアには、被害者と加害者が共存している。

**私は若きころ、学生運動に没頭していた。**私の所属していた組織は、非暴力の旗を掲げていたので、いつも私は殴られ役を演じていた。広いキャンパスで、100人余りの相手に取り囲まれ、袋叩きにあつたこともある。狭い自治会室で、逃げ遅れて数人の相手に顔面を激しく殴打され、失明寸前になったこともある。それでも私は、所属する組織の非暴力の方針を固く守り、相手に向かって一度も手を振り上げたことはなかった。その意味で、私は一貫して被害者であり、加害者にはならなかった。私は今でも、当時、私を殴った連中の氏名や顔つきをはっきり覚えている。そしてときどき、そのときの夢を見て、飛び起きることもある。軽いPTSDであろうか。

私に暴力を振った輩はその後、思想をかなぐり捨て、政治家になったり、一流企業の経営者になっていたり、団体の役員になったりしている。最近では、インターネットで検索すれば、彼らの現況がすぐにわかる。そのような輩の中に、法律関係の全国組織の理事長になっている奴がいることを、最近私は、ネット上でみつけた。私は激しい怒りを覚えた。彼は私に暴力をふるい、怪我まで負わせておきながら、なんの謝罪もせず、鉄面皮にも法律を守る仕事に就き、人生を全うしようとしているからである。私は絶対に彼を許さない。死ぬまでに、必ず彼の化けの皮を剥いでやりたいと思っている。

私は殺されたわけでもない。ただ殴られただけである。しかしこれだけの怨念を抱いている。現在、カンボジアで生きている40歳以上の人々は、親しい家族を殺されたり、自分自身が殺されそうになった被害者がほとんどである。彼らは一様に、心に深い傷を負っている。また加害者も多数生き続けている。多くの人間を虫けらのように叩き殺した加害者が、その後、人間としての正常な感覚でこの世を生きているとは、私にはとても思えない。カンボジアでは加害者が、被害者に心底から謝罪をする機会を持たず、そのままカンボジアの大地に住みついているのである。そのカンボジアの大地から、怨念という言葉が消滅したとは、私にはとても思えないし、この複雑な人間諸相を、私は理解することができない。

## 5. 現在に残るポル・ポト後遺症

現在、カンボジアの労働集約型企业で、奇妙な現象が起きている。従業員さんの失神事件が異様に多いのである。

私は世界中の多くの国で、縫製工場の経営に携わってきたが、これは初めての経験である。中国でもミャンマーでもバングラデシュでも、このような失神事件はなかった。昨年、カンボジアでは10社ほどで100人を越える失神者が出た。しかもそれは今も、引き続き起きている。識者たちはその原因を、栄養不足、労働環境の悪さ(暑さや空気の汚れ)などに求めている。私は、これはポル・ポト後遺症ではないかと考えている。これは大人の PTSD が、カンボジアの若者たちの発育に、色濃く投影した結果なのではないだろうか。

また東南アジア諸国と比べて、カンボジアのストライキは過激である。あの悲惨な状況を体験し、人生を計画的に生きることを放棄してしまった大人の影響で、カンボジアの若者たちが刹那的になっているからではないだろうか。

**私は若きころ、学生運動に没頭していた。**そのとき私は、インドシナ半島の情勢に疎く、一時は、ベトコンやパテト・ラオ、クメール・ルージュ(赤色クメール)に物心両面の支援をした。無知なるが故の行動とはいえ、それは深く反省すべきものである。私は、今年2月末に、井川先生を顧問に頼み、ポル・ポトの大虐殺の跡地を1週間かけて歩き、それを検証してみる。また失神事件を始めとするポル・ポト後遺症も、詳しく検討し、自らの落とし前をつけたいと考えている。

#### ポル・ポト(クメール・ルージュ)大虐殺の生存者の悲しみは続く＝**ポル・ポト後遺症**

「Svay Rieng 州に暮らす 61 歳の女性は、1970 年代後半に、8 人の家族をクメール・ルージュによって拉致され殺された経験をもつ。彼女は死んだ家族を恋しく想い、切望しています。これにより彼女の日常は多大な苦しみを伴っています」。これは、8 月に出版された Journal of Affective Disorders の中で、女性とのインタビューの要約である。なお、このインタビューは遷延性悲嘆障害における精神医学的状態の研究として行われたものである。これによると、クメール・ルージュの時代に愛する人々を殺害されたカンボジア国民は、その大きな悲しみが原因となり、回復や適応、容認などの能力が病理学的に不可能となってしまうという。PGD と称されるこの症状は、人の死によってもたらされた苦痛が少なくとも 6 ヶ月間遷延し、遺族が故人を激しく切望しているという点に特徴づけられている。

2008 年と 2009 年、研究者たちは、その政策によりおよそ 200 万人もの死者を出すこととなったクメール・ルージュの時代を生き抜いた、775 人に対してインタビューを行なった。そして、回答者のうち 14 パーセント以上もの人々が、この障害の症状に侵されていることがわかった。この研究に参加した人々は、クメール・ルージュが権威をふるった 1975 年から 1979 年の間に少なくとも 1 人身内をなくしている。参加者は極めて個人的な出来事に関して記憶や分析を行うように求められた。プノンペンを拠点と精神保健を研究している非営利団体 Transcultural Psychosocial Organisation の研究コーディネーター、Taing Sopheap 氏は、「はじめに、失った親族の数を数えるように言い、カウントしてもらいました。そして聞きました。今数えた亡くなった人たちの中で、誰の死がもっともあなたに影響を与えましたか」と。するとこの質問に対する回答の多くは、配偶者か子供だった。

クメール・ルージュは遺体を適切に埋葬することがほとんどなかったため、さまよう死者の声が聞こえると主張する遺族もいた。女性であることや教育の欠如、文化的慣習や亡くなった親族の数などといった要因もこの障害と関連があるが、研究の著者は「これらは莫大なリスクを生み出すことはなかった」と話す。

カンボジア人を襲った大虐殺の精神的影響は、過去数年間のうちにより注目を集めるようになってきている。今年早くに、ニューヨークを拠点としたフォーダムロースクールの Leitner Centre for International Law and Justice に在籍する記者は以下のように述べた。「カンボジア人の精神的健康についての議論は、クメール・ルージュ時代に受けた心的外傷の影響についてから始めるべきである。知的職業階級や法律家、作家、医師や裁判官などを一掃するという政治体制のもと、彼らは殺された。当時の早い段階において精神保健分野は破壊されており、政府は精神衰弱知的障害をもつ人々を踏み台にして権威を握っていった」。

「クメール・ルージュの時代、人々の精神状態に中間、というものはありませんでした。普通かクレイジーかのどちらかです」と Documentation Centre of Cambodia の事務局長 Youk Chhang 氏は話す。研究者たちは生き残った人々の心的外傷後ストレス障害率が極めて高いものであることを発見した。症状は PGD と似た点が多くある。しかし心的外傷後ストレス障害をもたらす原因はより広範囲であり、例えば残虐行為の経験であるとか、難民キャンプでの辛い生活なども原因となる。PGD は死別による心理的代償にもっぱら関連しているものだ。「PGD の危険性のある人口は少ない」との研究結果が出たとしても、実際の数値はもっと高いだろう」とインタビューに同席した Sopheap 氏は考えている。

以上

\*\*\*\*\*

### バングラデシュ短信 : 2012年 12月上旬

10. JAN. 13

中小企業家同友会アジア情報センター代表

東アジアセンター外部研究員(協力会理事)

小島正憲

#### 1. 12/22、タイのインラック首相、バングラデシュ訪問

12/22、タイのインラック首相がバングラデシュの首都ダッカを訪れ、同国のハシナ首相と会談した。インラック首相のバングラ訪問には、タイ企業の関係者を含む100人が同行した。両国首脳は、政府間や民間企業レベルでの関係強化に努め、貿易関係や投資拡大に取り組むことを確認した。

## 2. 貧困撲滅への新たな取り組み

### ①携帯バンキングの普及

バングラデシュ・クリシ銀行会長およびバングラデシュ銀行元総裁のコンドカール・イブラヒム・カレドは、「マイクロファイナンス金融機関は、国中にケータイバンキングを広めるため、銀行に替わるものになるかも知れない」と語った。BRAC 民間機関の専務取締役のマハブブ・ホセインは、「ケータイバンキングは、銀行に行くのを躊躇する貧困層の人たちのために役立つであろう」と言った。ダッチーバングラ銀行の事務次長アブル・カシム・MD.シリンは、「もし使わないのならコストは掛からないのでケータイバンキングにおいてコストは問題にならない」と言った。携帯オペレーター・ロビのマイケル・クエニールは、「サービスのコストと利便性はケータイバンキングのふたつの構成要素である」と語った。

### ②農村流通改革による貧困の撲滅

アジア開発銀行の研究によると、バングラデシュ政府は2015年までに飢えと貧困を撲滅させるという国連ミレニアム開発目標を達成させるために、農村改革に取り組んでいる。貧困は驚くほど減少したが、栄養失調に苦しむ2500万人の人々、つまり16.8%の人々の存在は、依然として大問題である。しかしバングラデシュ政府は二つの主な食物と野菜、つまり米とジャガイモの流通チェーンへの改革へととり着いた。「燃えよドラゴン、エレファント、タイガー」と名づけられた流通チェーンの静かな改革は、ADB と国際食糧政策研究所により、2008年の食糧高騰に対応して生み出された。それらの種子に25%の助成金が政府から支給され、バングラデシュ農業開発組合によって農民に売られるようになった。

その結果、農村のトレーダーたちの、米やジャガイモを供給する中で果たしてきた役目が低下し、今では上流部分の7%のシェアを持っているだけである。農民たちは農村のトレーダーに変わり、ダッカの小売業者へ直接販売するようになった。「80%以上の米やジャガイモ農民は、携帯電話を持っていて値段を交渉し、市場プライスの情報を得ている」と研究報告では伝えている。都市の消費者は、収穫された米やジャガイモ農民とのつながりが多ければ多いほど、質のよい米やジャガイモを、一年中手ごろな値段で買うことができるようになった。今は、米の小売価格の決定権における農民のシェアは60%であり、ジャガイモのほうは50%になっている。

### ③農村に拡大するソーラーホームシステム

グラミン・ショクティ(GS)は、11月30日に国内の農村地帯で、ソーラーホームシステムを100万件の家庭に取り付けた。この広がり具合で行くと GS は、2016年末までには200万件に達するであろう。この拡張は、世界銀行や他の海外寄付により財政援助されている政府機関 IDCOL からの融資と助成金でバックアップされてきた。GS はソーラーパワーを使い、約800万人の人々の家庭やビジネスに明かりをともすことができた。モスクや学校でこのソーラーパワーが使われる一方、携帯電話店、電気修理店、農業家畜場、農村病院、予防注射センターなどでもソーラーパワーが、現在使われている。

現地での組み立て、取り付け、部品の交換などは、グラミン技術センターの女性のエンジニアや技術者によって運営されている。これは GS がとても効率的な費用で顧客にサービスするのに役立っている。グラミン・ショクティは何百トンという灯油を100万というソーラーホームシステムに切り替え、実質的に二酸化炭素公害を減少させた。声明によると平均的に GS は一日に100個のソーラーホームシステムを取り付け、12,000人の若者の雇用を生み出している。

### ④BOP ビジネスへの見解

「グローバル企業は彼らのビジネスを推進するために、最貧困層に目を向けるべきだ」と専門家たちは語っている。「グローバル企業は彼らの市場戦略を、部分的に最貧困層に合わせているが、ピラミッドの底辺のビジネスに関して、発想の転換が必要である」と外交官は言い、「BOP を貧困とみなしてはならない。市場と見なさなければならぬのだ」と続けた。デーリースターの編集発行者のマフズ・アナムは、「BOP という考え方はバングラデシュのような国にあっている。2011年 UN 人権開発指数によると、約8600万人の人々でバングラデシュの最貧社会が形成されている。問題はピラミッドのトップの人々や中間の人々が、彼らを貧困層で技術がなく絶望的と見ていることだ。BOP からグローバル企業が協力して人々を引き出すと同時に、BOP ではない我々は、BOP に対する考え方を変える必要がある」と言った。ロヒマフルーズ・バングラデシュのグループディレクターは、「BOP の製品の多くは市場にアクセスしていない」と言った。グラミンフォーンのコマーシャル局副ディレクターのアマン・アシュラフ・ファイズは、「BOP がビジネスの新しい成長エリアになった」と言った。「携帯契約者のケースを見ても BOP には巨大な変化が起きた」とダッカ大学開発研究科会長のニアズ・アハメッドは語っている。市場アクセス・グループ副社長のシャリフ・M・ホセイン、ACI リミテ



ッドの専務取締役の F.H.アンサリー、アジアティック 360 の副社長サラ・ザカルらも同じ意見である。

### 3. 縫製工場大火の顛末

#### ①国際アパレルバイヤー、縫製工場の安全基準の見直しを要求

国際アパレルバイヤーは、11/30、労働者の安全とより良い条件を保証するために、バングラデシュの縫製業界で安全に関する法令の遵守処置が厳しく実行されるように呼びかけた。もしそれぞれの部門のリーダーたちが、特に健康と安全の問題に対して、法令遵守を怠れば、バイヤーたちのバングラデシュに対する信頼は失われてしまい、オーダーが激減するであろうと言った。バングラデシュ衣料メーカー及び輸出協会 (BGME) が、つい最近起きたアシュリアのタズリーン・ファッションリミテッドでの大火事を反省し、バイヤーの忠告を聞き、火災安全に対する協会の次のステップを報告するためにバイヤーたちに参集を呼びかけたところ、H&M, TSS, SEARS, TCHIBO, グローバル マーシェント、ギャップ、ナイキ、リーバイス、Kappahl, カルフール及びプリマークを含めた19のメンバーが集り、会議で彼らの見解を述べた。ただしウォルマートからの代表者は姿を見せなかった。

#### ②保険業者、既製服縫製工場の事故の増加に懸念

ここ数年、既製服縫製工場部門の補償金が増え続け、保険会社は増え続けるアパレル工場の事故を懸念している。「我々は国内トップの保険会社なので、我々が事故に一番苦しめられている」とグリーンデルタ保険会社の代表取締役ナシル・A チョードリは言った。グリーンデルタ会社は2010年には、既製服縫製工場の火事のために5600万タカの支払いをした。2012年9月までに、保険会社は補償金としてすでに4500万タカの支払いをした。

最近起きたタズリーン・ファッションでの火災では、100人以上の命が奪われた。この事件以来、工場主たちにも、工場の保険は不可欠なものであるという認識がひろがっており、保険に加入する業者が増えている。保険会社は、保険適応範囲を決定する前に、工場を詳しく点検し、工場側の安全方法や法令の遵守を知る必要があるとしている。「我々は自分たちで後方を点検する」と A・チョードリは言った。彼らも適応範囲を決定する前に工場を調査している。「我々は増え続ける事故に対応するために、新しい政策を考案する委員会を結成した」とバングラデシュ保険協会会長のシーク・カビール・ホセインは言った。彼の会社でも、既製服縫製工場での被害が増え続けているが、「工場主たちは彼らの労働者には保険をかけず、工場だけを適応範囲にしている」と言った。現在、バングラデシュには既製服縫製工場が、5000以上あり、主に欧米諸国に向けて衣服を生産している。

#### ③ハシナ首相、タズリーン火災被害者に6万タカを渡す

12/04、シーク・ハシナ首相は、11月24日に起きたアシュリアのタズリーン・ファッションで死亡した112人の労働者のうち43人の家族に、首相官邸で6万タカ (総額2580万タカ) ずつ手渡した。112人の家族全員に必要な金額は6720万タカに上る。それぞれの家族に手渡された6万タカのうち2万タカは首相救助福祉基金から、そして1万タカは労働雇用省、BGMEA、バングラデシュ銀行協会、そして香港に本部を持つ既製服輸入業者リー・アンド・ファンクから支払われた。BGMEA の責任者は、「バイヤー・船会社・既製服メーカーからの献金を集めるために、近日中に災害救助基金口座を開くことにしている」と話している。BGMEA の副会長 SM マンナン・コチは、「タズリーン火災で負傷した55人に対して治療費の責任を持つことにしている。その中の22人は市内のそれぞれの病院で治療を受けており、すでに退院した負傷者もいる。BGMEA は火災被害者にアパレル工場での仕事を提供し、被害者のリハビリに協力し、死亡家族の中に労働できるものがいなければ10年間援助し、それから怪我の治療費を支払うことにしている」と語っている。

#### ④タズリーン補償金についての混乱

12/08、労働者権利を守る活動家たちは、タズリーン火災の実際の犠牲者は、公式発表よりも多いと主張している。活動家の一人のミシュウは、「工場主が職場安全法を遵守せず多くの労働者を死なせた」として終身刑を要求した。ホセインは、「補償金が未払いの家族のために、政府は早急に補償金を確保するよう」に要求した。オヌー・ムハマッドはミシュウの見解を繰り返し、「工場主からの保証がないことは最も不幸なことだ。被害を受けたすべての家族に、近日中に補償金を支払ってほしい」と語った。火災でレヘナ・ベグムという26歳の妻を失ったアンワール・イスラム・アリフ は、「工場管理者たちは労働者の顔をよく知っているので、行方不明の労働者はすぐにわかるはずだ。彼らの給料と補償金は、早急に彼らの家族に与えられるべきである」と言った。

#### ⑤ EU 駐バングラ大使、既製服縫製工場の安全に尽力

12/06、EU 駐バングラ大使ウィリアム・ハンナは、バングラデシュ衣料メーカーにそれぞれの工場で安全基準を向上させるように要請した。またEUはバングラデシュの既製服工場の安全基準の向上に、必要な協力を惜しまないとして、アシュリアのタズリーン・ファッションでの火災悲劇の後、バングラデシュでの工場安全について改めて考える機会を設け、工場の管理者たちと工場内の安全やその他社会的な法令の遵守問題について検討し、共同声明を発表した。EU はすでにバングラデシュでの安全性の改善を手がけ、バングラデシュ消防及び民間防衛体制理事会と手

を結び、包括的な災害管理プログラムの中で、工場内での消防活動が改善されるように必要な道具や訓練を整えた。

#### ⑥BGMEA、トレーニングプログラム・管理開始

アパレルーBGMEAの国内のトップ団体は、12/10から始まる中堅管理部のトレーニングと一緒に、労働者のためのトレーニングも始める。この訓練は、先月アシュリアにあるタズリーン・ファッションリミテッドで起きた大惨事火災は、死者112人、多くの怪我人を出したために、再びこのような災害をくりかえさないようにとBGMEAが開始したものである。海外のバイヤーたちは、すべての労働者、特に中堅管理部、また工場主に対して、タズリーン・ファッション事故の後、アパレル業界のすべての工場で健康と安全を確実にするために、訓練プログラムをすることを強調している。 Bangladesh Textile Manufacturers' Association (BGMEA) 会長: シャフィウル・イスラム・モヒウッディンは、「今回はすべての労働者を訓練したい」と語った。

プログラムのコーディネーター: アディクル・ラハマンは、「我々はダッカの5つを含め、そのほかはアシュリア、ガジプール、サバル、ナラヤンゴンジ、ルプガンジ及びシンディ地域をカバーするためにすべての工場を10のゾーンに分けた」と言い、「工場主と生産管理マネージャー (PM)、PM アシスタント (ラインチーフ、スーパー・バイザー、コブリアンス・セル、メカニック、電気工そして警備) を含めて、9つの中堅管理部はBGMEAの講堂で訓練されると続けた。そして彼らが自分の工場に戻り、労働者を指導する」と付け加えた。BGMEAと消防隊の専門家たちは訓練プログラムを制定すると説明した。BGMEAの元会長でもあるイスラムは2001年に行なわれた訓練プログラムで、よい結果が出たと言った。2007年にもそのようなプログラムが行なわれたが、その後の追跡調査は行なわれなかった。

#### ⑦BGMEA、アパレル省の独立を求める

12/14、Bangladesh Textile Manufacturers' Association (BGMEA) は、政府に、既製服製造 (RMG) 企業の調整と効果的な政策を打ち出すために、独立したアパレル省の設立を求めた。BGMEA チーフは、「巨大産業の効果的代表的のために、独立したアパレル省が必要である。繊維ジュート省とアパレル企業の貢献を比べると、アパレル企業がどれだけ大きな貢献をしているかわかるであろう」と話した。BGMEAの火災対策クラッシュプログラムのコーディネーターは、「アパレル産業に関連するそれぞれのエージェンシーと、コーディネートする時が来た」と言った。衣料工場での火災安全について、アディクル・イスラムは、「BGMEAは中堅レベル雇用人ー工場の技術者、警備人、アシスタント生産マネージャーそしてラインマネージャーに訓練のインパクトを与えるためにプログラムを開始した」と述べた。消防局からの専門家は、「火災発生、防火、消火訓練の技術的知識を教えることになっている」と語った。

#### ⑧重要バイヤーはRMG企業家に期待

12/05、スウェーデンの小売チェーン H&M の地方マネージャー、デービッド・サブマンは、「中級レベルの管理を發展させ、インフラを改良し工場の安全を確保することが問題になっている」と言い、「バングラデシュは天然資源をたくさん持っていないかもしれないが、数多くの企業家たちが国のパワーになっている」と続けた。昨年、およそ15億ドルに相当する年間買い付額で、H&Mはウォルマートを退けバングラデシュでの最大のバイヤーとなった。バングラデシュで成功しているもうひとつの外国衣料企業 YONGON CORPORATION の会長: カハク・サングは、「膨大な労働力があるので国の未来は明るい。バングラデシュの人々は非常にひたむきで企業家的である」と続けた。これに対して、情報大臣ハサヌール・ホック・イヌーは、「安定した政治と腐敗との戦いを確実にすることがバングラデシュの二つの大きなチャレンジなるだろう。バングラデシュは援助依存から取引主導の国に徐々に変化してきている」と言った。

#### ⑨衣料アクセサリー・メーカー総売上120億ドル目標

衣料アクセサリー・メーカーは衣料輸出が増えているので、2018年までには需要が3倍に成長するであろうと予測している。Bangladesh Textile Manufacturers' Association (BGMEA) 会長のラフエズ・アラム・チョードリは、「国内アクセサリーの昨年度の会計年度の総額は37億5千万ドルであり、これは会計年度12年の輸出収入の15%以上になっている」と言った。BGMEA 会長は、「国内生産のアクセサリーが海外市場での需要が増えているので、2018年までには120億ドルのアクセサリー生産を目標に立てている」と語った。だから成長はこれから伸びていくであろう。現在アパレル輸出業者の要求するアクセサリーの90%は国内生産で間に合っており、10%だけが輸入されていると言った。国内で生産されているガーマンツ・アクセサリーは、波形カートン、ポリ袋、ボタン、ファスナーそしてラベルなどで、これらは既製服輸出に欠かせないものばかりである。KDS, DAF, RFL, ベンガル・アンド・パーテックスを含めプラスチック業者は、衣料アクセサリーや他の製品を生産するために自社で多額な投資をしている。Bangladesh Textile Manufacturers' Association (BGMEA) の元会長: シャヘドゥール・イスラム・ヘラルは、「バングラデシュからの既製服の輸出は毎年増え続ける。結果として、国内製のプラスチック製品やアクセサリーの需要も伸びていく」と述べている。

#### ⑩バングラデシュ衣料ラボがチッタゴンにオープン

11/28、バングラデシュ衣料メーカー及び輸出協会の会長代理のナシル・ウッディン・チョードリは、「チッタゴンで SGS バングラデシュリミテッドの衣料及び繊維のラボを開いた。ラボは品質をテストすることを提供することにより、国内のアパレル業界の安定した成長に役立ち、国内でも港町でのビジネスを開発させる必要な役割も果たすであろう」と述べた。イベントに参加していたスイスの大使ウルス・ヘッレンは、「このようなラボを建設するイニシアティブは、チッタゴンの見直しを進めることにもなるであろう」と特別ゲストとして語った。SGS バングラデシュの代表取締役アリエル・ミランダは、「SGS は最新技術のラボに物理的・化学的なテスト設備を設ける。SGS グループは検査、検証、テスト、証明書サービスの革新者である」と語った。

#### 4. 投資・インフラ関連

##### ①バングラデシュへの直接投資増加

BSS の報告によると、バングラデシュは海外直接投資 (FDI) の受領国トップ5に入ったという。この情報機関は定期的に世界中をモニターしており、先週発行された報告書では、アフリカのアンゴラ、東ヨーロッパのマケドニアに続きバングラデシュを3位に位置づけた。バングラデシュ銀行 (BB) の掲載最新報告 11 月号では、現在の会計年度 2012-13 の上半期 FDI として 699.89 億ドルを受け取ったと報告した。世界投資報告 (WIR) によると、2011 年にバングラデシュは 11 億 3 千万ドルの海外直接投資を受け取ったと報告した。これはこれまでになく高い海外からの投資額である。衣料部門は昨年の最高投資額で 2 億 7 億 1 千万ドルであり、これに続きバンキング部門 2 億 4 億 9 千万ドル、エネルギー部門 2 億 3 億 8 千万ドルであった。テレコミュニケーションは 1 億 8 千万ドルだけの投資であった。

##### ②日本政府、ダッカの大型高速開発プロジェクトに 21 億ドルを融資

12/03、日本政府は、ダッカのメトロレールウェー計画を含め 3 つの大型インフラ・電力プロジェクトのために 9 億ドルを融資することを約束した。日本大使佐渡島志郎氏は、財務大臣 AMANO に覚書を渡し、「日本はバングラデシュの開発を支援する。我々はこの国の人々がよりよい暮らしができるようにお手伝いしたい」と話した。

合計金額のうち 1 億 3 千万ドルは大型高速交通 (MRT) かメトロレールプロジェクトに当て、4 億 6 千万ドルはベラマラ結合パワープラント、そして 3 億 8 千万ドルはナショナル・パワー伝達ラインに融資されることになっている。「日本は MRT プロジェクトの 27 億ドルのうち 21 億ドルをもつことになっている」と AMANO は彼の事務局でレポーターに伝え、「融資合意は健康部門のプロジェクト 1 億 2 千万ドルを含めて、10 億ドルが実施される予定である。まもなく署名されるであろう」と付け加えた。MRT は 20km 以上のメトロレール建設プロジェクトで、現政府の優先的なプロジェクトのひとつで、交通ロック解決のために市内の一番大切な計画のひとつと信じられている。

ダッカ訪問中の JICA 副会長の黒柳俊之は、12/03、経済関係局 (ERD) での記者会見で公式に契約を発表した。主に日本国際協力機構 (JICA) が 11 億 4 千万円か、1 億 3 千万ドルを、第 3 ODA 融資パッケージで融資する。ダッカのような大都市では大型交通プロジェクトが必要である。市内からガジプールへ行くのに 3 時間半掛かった」と苦い経験を話しながら語った。日本はダッカ大型高速交通開発プロジェクトのために合計 21 億ドル用意することになっている。しかし正式な契約は日本側からはされていない。20.1km 大型高速交通プロジェクトは、ウットラの第 3 セクターからモティジールのバングラデシュ銀行までの計画である。高速交通システムはピークタイムには一時間に 60,000 人を輸送することができる。「プロジェクトはいつ始まるのか」と言う質問に、「この計画はまだ正式な融資契約の署名に至っていないのでもう少し時間が掛かる」と黒柳は言った。

\*\*\*\*\*

#### 【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	1.9	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
9 月	9.6	13.3	18.8	3.6	23.2	169	25.1	24.4	12.2	6.1	19.0	18.5
10 月		13.1	18.6	4.4	23.7	271	22.8	25.4	8.7	7.9	19.3	19.3
11 月		13.3	18.7	5.1	29.1	229	34.9	37.9	28.1	38.2	19.5	19.8
12 月	9.8	13.5	19.1	4.6	20.4	131	17.9	25.6	9.2	-13.3	19.7	19.9
2011 年	9.2											
1 月			19.9	4.9	23.7	65	37.7	51.4	16.6	11.4	17.3	16.9
2 月		14.9	11.6	4.9	—	-73	2.3	19.7	-10.9	32.2	15.7	16.2



3月	9.7	14.8	17.4	5.4	31.2	1	35.8	27.4	10.5	32.9	16.6	16.2
4月		13.4	17.1	5.3	37.2	114	29.8	22.0	8.2	15.2	15.4	15.8
5月		13.3	16.9	5.5	33.6	130	19.3	28.4	12.1	13.4	15.1	15.4
6月	9.5	15.1	17.7	6.4	11.8	223	17.9	19.0	6.6	2.8	15.9	15.2
7月		14.0	17.2	6.5	27.7	315	20.3	23.0	2.7	19.8	14.7	15.0
8月		13.5	17.0	6.2	33.4	178	24.4	30.4	6.4	11.1	13.6	14.8
9月	9.1	13.8	17.7	6.1	27.3	145	17.0	21.1	-3.5	7.9	13.1	14.3
10月		13.2	17.2	5.5	34.1	170	15.8	29.1	-0.6	8.7	16.7	14.1
11月		12.4	17.3	4.2	21.4	145	13.8	22.6	-12.9	-9.8	16.2	14.0
12月	8.9	12.8	18.1	4.1	5.7	165	13.3	12.1	-15.4	-12.7	17.3	14.3
2012年												
1月				4.5	25.3	273	-0.5	-15.0	4.6	10.8	16.6	14.8
2月		21.3		3.2	—	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7
4月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4	-26.1	-0.7	17.5	15.4
5月		9.6	13.8	3.0	21.0	187	15.3	12.7	-6.1	0.0	17.9	15.7
6月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12月				2.5		316	14.0	6.0			14.4	15.0

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。  
2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。  
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。